

河合榮治郎が求める旧制高等学校生像とその教養

末 松 亜 紀

要旨

本稿で焦点を当てる東京帝国大学経済学部教授の河合榮治郎(1891-1944)は、1938年の「河合事件」に代表されるように、昭和戦前期において、命の危険を冒して敢然とファシズムや軍部の暴走を批判し、国家としての正しい姿を求めた自由主義者として著名である。一方で、人文科学の読書を中心とした知的な鍛錬や、幅広い文化の享受によって人格の完成を目指し、さらに社会性、実践性を兼ね備えることを求めた昭和期の教養主義の先導者としても際立った存在である。本稿では主に、後者の教養主義者としての側面を取り上げる。

河合は旧制高等学校やそこに在籍する生徒に格別な関心を抱いたが、河合の高等学校観を正面から体系的に論じた論文は、管見の限りこれまで無い。そこで本稿では①人格形成上、高等学校時代をどのように意義付けていたのか、②教養形成上、読書をどのように位置づけていたのか、③高等学校生に求める教養を、どのような内実として考えていたのか、という以上三つの観点を持ちつつ、「高等学校時代の読書」(1935年『第一学生生活』日本評論社)に掲載された文献目録を手掛かりとして、河合の求める高等学校生像に迫っていく。

さて旧制高等学校は、1886年4月9日に公布された「中学校令」によって教育制度上に明確に位置づけられた。1918年の「第二次高等学校令」によって高等普通教育の完成機関となり、専門的な大学教育の基礎として、広い視野と教養を与えて人間形成を行うことが主な役割となった。これは学校制度上独自の位置づけで、特異な存在であった。一般教養教育を重んじた正規学科目だけではなく、多くの旧制高等学校にあった寄宿寮において、生徒たちが寝食を共にし、読書や活発な議論が交わされるなど、濃密な人間関係を通して人格を形成していったとされる。

河合はそのような旧制高等学校を「日本の学生生活の精華」と、人格形成上高く位置づけ、高等学校時代は「私はいかにあるべきか」(What should I be?)という問いを抱きながら、「人生観を構築すること」が重要な任務であるとした。なお、河合自身も1908年に第一高等学校に入学し、そこで校長である新渡戸稲造や弁論部の先輩によって理想主義思想の影響を強く受け、人格の完成こそが人生の目的であるという新たな人生観を構築したのである。これこそ、河合の旧制高等学校観や学生観の原体験になっていると推測できる。

さて河合は、高等学校生活の中心は哲学や倫理学を中心とした豊富な読書であるとしている。読書が人生観構築とともに、生徒たちの教養形成に資するということは言うまでもない。さて、河合が発表した「高等学校時代の読書」の文献目

録(以下、「当目録」)は、全体として旧制高等学校生たちの人生観構築や教養形成に資する文献が選択されている。「哲学」「倫理学」「思想」「社会思想」「伝記」「歴史」「文学」「随筆紀行」「経典宗教」「科学」の10項目で構成されており、やや大きく見ると、哲・史・文の人文科学を中心として、社会科学は社会思想までを含み、若干の自然科学も含んでいる。合わせて188件の書物が掲載され、その中でも特に繙読が推奨される28件(14.8%)の書物には、「※」印がつけられている。

その中でも、作者の人生観が作中に表現されるなど、河合が重視した哲学と親和性が高い「文学」の項目において、河合が求めている人生観構築の姿勢、そして人生観や教養の内実が作家の顔ぶれによって顕著に現れている。例えば教養小説(Bildungsroman)として著名なゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』とロマン・ローラン『ジャン・クリストフ』が掲載されており、また夏目漱石、島崎藤村、国木田独步、有島武郎、二葉亭四迷の作中に出てくる、人生に向き合って誠実に悩む青年の姿は、まさに河合の求めている学生の姿である。さらに日本の文学思潮では、理想主義思想を基調としている白樺派が重んじられる一方で、恋愛を重んじるロマン主義や美と快楽を味わい尽くすことに人生最高の価値を見出す耽美派、また性欲や生まれつき与えられた条件から人間が逃れられない様を描いた自然主義、当時非合法とされた日本共産党に属する作家が多く、作品にはそれらの活動に導こうとする傾向があるプロレタリア文学などは掲載されていない。このように、当項目に採用されていない文学思潮にこそ、河合の求めている人生観が反転して示されていると考えられる。つまり、河合の思想体系の中核にある、人格に最高価値を置く理想主義を人生観として持ってほしいと考えていることが分かる。

はじめに

本稿¹で焦点を当てる東京帝国大学経済学部教授の河合榮治郎（1891-1944）は、1938（昭和13）年の「河合事件」に代表されるように、昭和戦前期において、命の危険を冒して敢然とファシズムや軍部の暴走を批判し、国家としての正しい姿を求めた自由主義者として著名である。武田清子は河合の思想体系を「日本における自由主義の歴史における一つの金字塔」²であると評している。河合の自由主義者としての側面を緻密に論じているものとしては、松井慎一郎に詳しい³。一方で、人文科学の読書を中心とした知的な鍛錬や、幅広い文化の享受によって人格の完成を目指し、さらに社会性、実践性を兼ね備えることを求めた昭和期の教養主義の先導者としても際立った存在である。本稿では主に、後者の教養主義者としての側面を取り上げ、深く掘り下げたい。

教養主義の形成、変容の過程と、そこにおける河合の位置、役割などについては、竹内洋⁴や筒井清忠⁵に詳しい。河合の教養論に関する主な先行研究は、伊原吉之助（1965）⁶、渡辺かよ子（1989）⁷（1990）⁸、清滝仁志（2008）⁹、青木育志（2012）¹⁰などが挙げられる。伊原は、河合の教養論の独自性は教養概念に社会的関心を組み入れた点にあると早い時期に指摘しており、その後の研究の基礎を築いた。また渡辺は、河合の教養論が一般教育と専門教育の葛藤の解決を試みたものだと意義づけた。さらに1936年から1941年にかけて河合が編纂し、様々な有識者が学生たちに教養や人格の大切さを説いて「昭和教養主義のバイブル」とされた『学生叢書』（全12巻）の一卷目『学生と教養』の内容分析をし、そこで説かれた教養は執筆者によって定義が異なることを指摘した。しかし、教養が理想主義思想に基づいて、学生時代に自己形成に励む際の目標として説かれていること、そして具体的には卒業後、各自の専門的職業に勤しむことを通じて教養は深められるとしたことは共通している

とした。またこの点において、一般教育と専門教育を統合したと渡辺は指摘している。また清滝は、河合の教養論は高等教育改革のための実践の一形態であったと指摘している。青木は河合の教養論を「人格における(学問、道徳、芸術の)統一の原理」「心の中の対話と戦いの原理」「永遠の向上、成長の原理」の三つの原理に分類した。これらはそれぞれに注目すべき研究成果だが、河合の教養観の具体的な内実に迫りきれていない憾みがある。

ところで、河合の発表した教養論のほとんどが高等学校生を念頭に置いているなど、河合は旧制高等学校やそこに在籍する生徒に格別な関心を抱いていた。しかし、河合の高等学校観を正面から体系的に論じた論文は、管見の限りこれまで無く、わずか高鹽忠愛による化学の重要性を述べた論評のみである¹¹。

そこで本稿ではまず、河合自身の高等学校時代の実体験や旧制高等学校の学校制度上における独自の位置を確認する。そのうえで、①人格形成上、高等学校時代をどのように意義づけていたのか、②教養形成上、読書をどのように位置づけていたのか、③高等学校生に求める教養を、どのような内実として考えていたのか、という以上三つの観点を持ち、「高等学校時代の読書」¹²に掲載された文献目録を手掛かりとして、河合の求める旧制高等学校生像に迫っていく。

1. 河合榮治郎の自己形成史と社会活動

河合榮治郎は、1891(明治24)年2月13日、東京府南足立郡千住(現在の足立区千住)で酒屋を営む河合善兵衛・曾代の次男として生まれた。一家はその地域の名士であったが、教養とは無縁の家庭環境であった。高等学校入学以前の河合は、「日本伝来の国粹主義者であり、帝国主義者であり、全体主義者であり、立身出世主義者であった。もっと適切に云

末松 亜紀

えば凡そ主義とか原理とかを持たない生まれたままの青年であった」¹³と自らを回顧しており、現世的な思想を内面化していることが分かる。しかし1908（明治41）年9月、第一高等学校に入学後すぐ弁論部に入部し、校長である新渡戸稲造（1862-1933）¹⁴と弁論部の先輩によって理想主義思想の影響を強く受け、新たな人生観を構築することとなったのである。そのことについて、以下2つの引用のように回顧している。

〔新渡戸〕博士が一高の校長をして居られる時に、私は一高に入学して博士の指導を受けた。東京の商人の家に生まれ東京で小学中学を卒えた私には教養と云う雰囲気は全く欠けていた。そして多くの当時の青年と同じように立身出世を夢みて、その為ばかりで勉学を鞭うっていたのであった。そうした私にとって、博士を校長とする一高の生活は正に驚異であった。始めて俗世の立身の外に、人世の目的のあることを教えられた。又英国、独逸の豊かな教養の世界が、私の眼の前に開かれた。私が後に理想主義と云う哲学的立場を採るに至ったのは、全く当時受けた博士からの賜物であった。¹⁵

博士はよく to be or to do と云う言葉を使われた、人の価値はその為した事業の結果にあるか、或いは人その人にあるかと云う意味であるが、云うまでもなく博士は to be の方を肯定されたのである。最も価値のあるものは、名誉でも富でもなく、又学問でも事業でもなく、彼れの人格に在ると云う彼の理想主義は、私に教えられた。私の価値の判断は転倒した。従来の私は死んで新しき私は生まれた。¹⁶

このように河合自身が高等学校時代に、人格の完成こそが人生の目的であるという新たな人生観を構築したことが、本稿で論じる河合の高等学校観や学生観の原体験となっていると推測できる。

1911年9月に東京帝国大学法科大学政治学科に入学後間もなく、コロ

ンピア大学セリグマン教授によってマルクス、エンゲルスの唯物史観が説明された『歴史の経済的説明』(河上肇訳『歴史の経済的説明 新史観』)に出合った。同書を契機として、社会改革の必要に目覚めるとともに労働問題に関心を持った。1915年に社会改革への志を持って農商務省に入省し、工場法の施行に尽力した。しかし上司と意見が合わず4年後に退職し、1920年に東京帝国大学経済学部助教授に就任、さらに1926年に教授となった。

河合は大学で経済学史、社会政策を講じ、学問的研鑽を積むとともに、熱意をもって大学内外の学生たちの教養形成を促した。その中でもきわめて注目されるのが、1936年から1941年にかけて、『学生叢書』全12巻(発行順に『学生と教養』、『学生と生活』、『学生と先哲』、『学生と社会』、『学生と読書』、『学生と学園』、『学生と科学』、『学生と歴史』、『学生と日本』、『学生と芸術』、『学生と西洋』、『学生と哲学』)を編纂したことである。このことにより、昭和期の教養主義(昭和教養主義)を先導した教養主義者として名を馳せたのである。

また本稿の冒頭でも述べたように、命の危険を冒して、敢然とファシズムや軍部の暴走を批判した戦闘的自由主義者としても、同時期に卓絶した存在であった。河合は『ファシズム批判』(1934年 日本評論社)において、自由主義者としての立場を鮮明に打ち出し、五・一五事件、満州事変、滝川事件、統帥権干犯問題、ドイツやイタリアのファシズムなどを強く批判し、日本の自由主義の擁護を強く訴えた。また1935年の天皇機関説事件も批判し、翌年の二・二六事件に対して直ちに帝大新聞にて「二・二六事件の批判」を発表した。しかし軍部の反動を招いたため、1938(昭和13)年に『ファシズム批判』(1934年 日本評論社)、『社会政策原理』(1931年 日本評論社)、『第二学生生活』(1937年 日本評論社)、『時局と自由主義』(1937年 日本評論社)の4つの著書が発禁処分になった。さらに1939年1月東京帝国大学を休職処分に追い込まれ、同年3月に出版法違反により起訴、1943年に大審院で有罪が確定した。この一連

末松 亜紀

の出来事が「河合事件」である。河合はこのような逆境においても、自身の自由主義思想を変えずに主張し続け、さらに教養の全体像について体系的に述べた『学生に与う』(1940 日本評論社)を発表するなど、自由主義者ならびに教養主義者として両方の思想を貫いた。しかし、1944(昭和19)年2月15日、心臓麻痺にて53年の人生に幕を閉じたのであった。

さて本稿で、このような人生を送った河合が旧制高等学校や生徒たちにとどのような姿を求めたのか論じるにあたり、まずは旧制高等学校の制度的な発展と特徴的性格について見ていこう。

2. 旧制高等学校の成立と展開

旧制高等学校は、1886年4月9日に公布された「中学校令」によって教育制度上に明確に位置づけられ、官立二年制の「高等中学校」として出発した。中学校令に基づき、高等中学校が東京、京都、仙台、金沢、熊本の全国5地区に設置された。それに加え、「諸学校通則」に基づき、山口と鹿児島にも設置が認められた。これらの高等中学校では、実質的には帝国大学予科としての特色が色濃く、ほとんどの卒業生が帝国大学へ進学した。なお、特定の帝国大学・学科を志望する場合を除き、帝国大学への進学を保証されるという特権を持ち、それは旧制高等学校が廃止されるまで続いたのであった。

やがて1894年6月25日に公布された「高等学校令」によって、従来の高等中学校は「高等学校」と名称を改め、三年制となった。高等学校令第二条では「高等学校ハ専門学科ヲ教授スル所トス但シ帝国大学ニ入学スル者ノ為メ予科ヲ設クルコトヲ得」¹⁷とし、専門学科を教授する課程を中心的なものとして、名称だけではなく制度的性格も改革されたのである。しかし実態としては、専門学科を教授する課程を設けたのは第

三高等学校の法学部と工学部、第五高等学校の工学部のみで、その他は大学予科としての性格を引き継いでいた。

さらに第一次世界大戦後、これまでの教育を全面的に見直すために臨時教育会議が設置され、そこで新たな高等学校像が打ち出された。そのようにして1918(大正7)年12月5日に改正された「高等学校令」が公布され、新制度の学校として再出発した。高等学校令の第一条では、「高等学校ハ男子ノ高等普通教育ヲ完成スルヲ以テ目的トシ特ニ国民道德ノ充実ニカムヘキモノトス」¹⁸とし、従来の大学予科としての教育目的を制度上除き、大学から独立した高等普通教育の完成機関となったのである。しかし実態としては、帝国大学や官立大学への進学の前段階として一般的に認識され、卒業生の大半は帝国大学や官立大学に進学したのであった。

一方で、高等学校進学者の目から見れば、従来の狭い専門教育という教育目的は大学まで持ち越され、高等学校では専門的な大学教育の基礎として、広い視野と教養を与えて人間形成を行うことが主な役割となった。一般的に、旧制高等学校の生徒たちは正規学科外の校友会活動や寮生活、読書などで教養を培い、人間形成をしたと考えられているが、正規学科の中においても教養を培うように十分配慮されていることが分かる。高等学校では大きく文科と理科に分かれており、かつ第一外国語の違いによって甲(英語)、乙(ドイツ語)、丙(フランス語)の3つに分かれていた。なお、文科と理科の「各学年における各学科目の毎週教授時数」は、文科、理科に限らず授業時間数の3分の1以上を第一外国語、第二外国語の科目が占めている¹⁹。よって、高等学校において最も重視されたのは外国語であると指摘されている²⁰。それに加えて文科の学科目に「哲学概説」が新たに登場し、第三学年において週3時間学習することになっていることは注目に値する。教養に欠かせない哲学的思考を「哲学概説」において十分に鍛えられ、哲学書の読書へと誘われたのではないかと推測できる。また外国語の授業においても、思想的な文献がし

末松 亜紀

ばしば教科書として使用されていた。さらに寺崎昌男は「たとえば文科の学生に対しても数学・自然科学などが課せられ、理科の学生に対しても法制・経済が課せられるというように、つとめて専門化がさけられていた」²¹と指摘し、「高等学校の各学科は専門的な事項に限ることなく、生徒に対して広い視野と教養を与えるように意図されていたのである」²²と言及している。寺崎は最後にまとめて「旧体制下の日本の大学は、設置主体の種類を問わず、すべてその下の学校段階でなんらかの意味における一般教養的教育を受けてきた学生を収容する制度となっていた。大学教育自体は高度に専門化されていたが、専門教育の基礎として、また人間教育の目的から一般教育を用意していたとみななければならない」²³と分析している。ここから高等普通教育の完成機関である高等学校が、「一般教養的教育」を教授する場として機能していたことが分かる。

その他に見られる改正された高等学校令の特徴としては、高等学校令第二条「高等学校ハ官立、公立又ハ私立トス」²⁴とし、従来の官立に加えて公立、私立の設置も認めて、高等学校が全国に増設されていったことである。官立は1919年から1923年の5年間に17校増設され、既存の8校を加えて25校となった。既存の8校は1908年までに創られた第一高等学校から第八高等学校のことを指し、「ナンバースクール」と呼ばれる。一方、増設された17校は校名に地名を冠した学校で「地名校」と呼ばれる。さらに新たに認められた「公立」と「私立」も1921年から1929年までに、私立が4校と公立が3校創設された。つまり高等学校令以降に、官立の地名校、公立、私立の高等学校が合計24校増設されており、これらの増設は高等学校令改正による画期的な成果の一つである。高等学校増設の背景として筧田は、「第一に、国民に高等教育を受けようとする要求が強くなり、またその教育受容の能力のある生徒が多数あったにもかかわらず、その生徒を収容する高等教育の諸学校、とくに高等学校の施設が不足していたこと、第二に、日本の文化・産業の拡大発展に対応して、国家・社会が高等教育を受けた多数の人材を必要としたこと」²⁵

の二点にまとめている。

さらに大きな特徴としては、高等学校令第七条「高等学校ノ修業年限ハ七年トシ高等科三年尋常科四年トス」²⁶によって、高等学校を高等科三年と尋常科四年で構成される「七年制高等学校」としたことである。しかし、従来の高等学校が高等科三年のみの形態の学校としても認められたため、この七年制を実施したのは官立25校中1校、その他公立の3校、私立の4校の計8校に留まり、ほとんどの高等学校は従来の形態を維持したのである。

さて、高等学校文化の主な舞台は、寄宿寮での生活であった。全寮制を貫いた第一高等学校をはじめ、多くの旧制高等学校には寮があり、そこでは生徒たちの自由と自治が重んじられた。寮で寝食を共にし、活発な議論が交わされるなど、濃密な人間関係を通じて、生徒たちは友情を育み切磋琢磨していたと言われている。また「読書をつうじての教養は大正時代以後の旧制高校の規範文化」²⁷であり、生徒たちが西洋の書物を主として熱心に読書に励んだ中で、いくつか定番となる書物が登場した。それらは阿部次郎の『三太郎の日記』(1914-1918年)や西田幾多郎の『善の研究』(1911年)、ゲーテの『ファウスト』(第一部1808年、第二部1832年)、倉田百三の『出家とその弟子』(1916年)と『愛と認識との出発』(1921年)、和辻哲郎の『古寺巡礼』(1919年)などであった。

また、寮では年に一回「寮創立記念祭」が行われ、生徒たちの親睦・交流のためだけではなく一般の市民にも開放され、地域に定着した行事となっていた。その記念祭に向けて生徒たちが作詞、作曲した寮歌が、高等学校文化の華とされている。明治30年代に入ると盛んに作られるようになり、第一高等学校では1902年に「嗚呼玉杯に花うけて」など、学校や生徒たちの気風を代表し、永く愛唱される寮歌が登場してくる。その他に注目すべきは1913年に、第一高等学校で『向陵誌』が生徒たちの手によって編纂、刊行されたことである。これを皮切りに、これ以降各校で寮史がまとめられていくこととなる。ここから、生徒たちが寮を高

末松 亜紀

等学校生活の中心と強く意識し、自らの成長の場として意義付けていることが分かる。

しかし、第二次世界大戦後の教育改革により、1947年の「学校教育法」によって制度的に廃止され、1950年3月、最終年度の卒業生を送り出し、64年間の歴史に幕を下ろしたのであった。そして私立を除き、ほとんどの旧制高等学校が新設の国立大学に吸収合併された。

3. 河合の高等学校観

河合は自身の高等学校観を示す論文を、1934年から1937年の間に集中して発表している。1934年11月の日記に「近頃高等学校、浦和、水戸、山形、岡山等から講演会に招かれる」²⁸と記しており、旧制高等学校との接点を確認することができる。これは同年の『改造』4月号に「現代学生に与う」を発表した影響によるもので、学校からの公的な依頼ではなく学生からの依頼である²⁹。また翌年の1935年6月下旬に『（第一）学生生活』³⁰を出したことも、高等学校での講演依頼が増加したことに影響している³¹。日記などで確認できる限りでは、1934年で6件、1935年で8件、1936年で5件、1937年で2件、高等学校にて講演している。このように高等学校との関わりが深まったため、河合の中で関心が高まり、高等学校に関する論文を発表していたものと考えられる。河合の高等学校に関する論文では、制度について論じることは少なく、人間形成の場としての理想的なあり方を論じたものがほとんどである。主な論文は、以下の4件である。

- ・「現代学生に与う」（1934年『改造』4月号 改造社）
- ・「高等学校時代の読書」（1935年『第一学生生活』日本評論社）
- ・「高等学校論」（1935年『帝国大学新聞』3月4日、11日、18日）

・「大学予科の生活」(1937年 第一高等学校弁論部の講演)

まず河合は「実に高等学校三年の生活は、日本の学生生活の精華であり、大学系統の過程において最も重要な位置を占めている」³²と、旧制高等学校を高く位置づけている。さらに続けて、以下のように述べている。

帝国大学の卒業生と専門学校のそれとの間に優劣の差があるとすれば、その差は専門智識の量的の差にあるのではなくて、人物の優劣の差に在るとは、多数の人の意見の一致する所である。而して人物の差は、何処から由来するかといえば、高等学校三年という特異の時代を経過したかどうかという所に在る。確固とした道徳性、偶然に支配されずして物の本質を把握する能力、視野教養の広さ豊かさ、之等の多くは高等学校の生活以外にえられようとは考えられないのである。高等学校の意義はかく重要である。之れ私がこの生活を以て日本学生生活の精華と称す所以である。³³

このように、「広汎なる視野、深い所の洞察、信頼出来る所の道徳」³⁴という特質を持っている帝国大学の卒業生を高く評価しており、そのような特質の源泉は高等学校での生活であるとしている。なお、帝国大学の卒業生と専門学校の卒業生との差は、先述の寺崎の言及のように旧制高等学校における一般教養教育を重んじた正規科目にもあるが、むしろ河合が大きな意味を認めたのは、「高等学校生活の中心が教室外の読書と思索と交遊とに在る」³⁵というように、正規学科外の自発的な学生文化であった³⁶。

さて、河合は日本学生生活の精華であるとされる高等学校時代の意義、あるいは重要な任務として、「人生観を作ること」³⁷を挙げている。その他にも「自己の原理を把握する」³⁸、「客観現象に眼を向ける前に、客観に対立する主観それ自身を整理すること」³⁹、「客観的現象に対立して、そこ

末松 亜紀

に当面して立って居る所の諸君それ自身への考察に戻っていく生活」⁴⁰、「諸君自身を考察の対象とし、従来の命令に対して何故かと云う問いを出すこと」⁴¹など、様々な言い表し方をしている。しかしここでは「人生観を作ること」という表現に統一して論じていく。

さて、河合の論ずるところによると、我々は幼年時代より周囲の人々から「正直であれ」「勤勉であれ」「純潔であれ」「争うな」「盗むな」など、色々と教え込まれ構成してきた人生観がある。しかし、それらは実に無意識的であり無組織的である。大多数の人は、周囲から注入された人生観に疑問や反発心を抱きながらも、世間的な道徳に従って一生を終える。一方で少数の人は立ち止まって「今まで外から注ぎ込まれた命令に対して『何故か』(Why?)と云う問いを発する」⁴²のである。やがてその一つひとつの命令に対する『何故か』(Why?)という問いは、「私はいかにあるべきか』(What should I be?)という問いに昇華されていくのである。河合は「諸君、What should I be?と云う問題を抱くか否かによって、凡そ人間は二つの種類に分かれると云えないだろうか」⁴³と論じており、この問いを格別なものとして重視していることが分かる。なお、これは新渡戸が第一高等学校校長時代に繰り返し唱えた“to be”を、河合なりに表現し直していると見ることができる。さて、上記のように疑問を抱くことのできる「少数の人」とは、「自ら食うことの為に、即ち動物的生活の為に、一日の時間と精神とを傾け尽くしている人には、こうした問を発する余裕がありません。かくして此の問は多くは学生生活を送るものに限られて来る」⁴⁴と、学生であるとしている。そして高等学校時代にこそ、従来の混沌とした人生観を検討と考察の対象として再批判することによって、自らの新たな人生観の構築を開始せよというのである。ここには河合自身の高等学校時代の経験が、明確に反映している。

では、上記のような営みを学生生活の中でも、高等学校時代に行うべきであると限定しているのは何故なのだろうか。その理由は二つある。まず一つ目の理由としては、同じ学生であっても中学校時代はまだ人間

として成熟しておらず、高等学校の入学試験を控えて慌ただしく過ごしている。また大学時代も専攻する学問知識の修得に忙しく、さらに就職問題も抱えている。しかしこれら二つの間に位置した高等学校の三年間はまだ特定の専攻学問に分化しておらず、時間的にも精神的にも「自己反省の余裕」⁴⁵を十分有していることが挙げられる。二つ目の理由としては、二十歳前後は性に目覚める時期であり、これまで教えられてきた「純潔であれ」という命令に無条件に従うことが難しくなってくる。あるいは高等学校に無事入学し、帝国大学への進学も現実的になった時に、これまでの「勤勉であれ」という命令にも無条件で応じることができなくなってくる。このように、今まで周囲から受けた命令に疑問を抱きやすい時期にあたっていることが挙げられる。つまり時間的、精神的な自己反省の余裕と年齢や学校段階から来る時機により、「高等学校三年の生活は、中学大学の何れでもないものとして、此の生涯の重大任務に当てられている」⁴⁶のである。以上から、高等学校時代は自らの新しい人生観を構築するという出発点、あるいは人生の転換期として、河合が特別に意義付けていることが分かる。これら河合の論は、1918(大正7)年の第二次高等学校令で示されたように、高等普通教育の完成機関であり、かつ帝国大学に進学を保証されている余裕に裏づけられていると思われる。

さて河合は、「意義ある高等学校生活の中心は二つの方面に在る、一つは寄宿舍を共にする集団生活であり、他は各自の孤独の生活である」⁴⁷としたうえで、とりわけ「各自の孤独の生活」⁴⁸に重点を置いている。そこで為すべきこととしては、「読書」と「静思」の二つを挙げている。河合は「静思に人を促す動力、静思する資料を供するものは、読書でなければならない」⁴⁹とし、読書こそが高等学校時代において、深めるべき重要な具体的行為と位置づけている。その理由のひとつとして、「諸君の抱く問題 [What should I be?] は嘗ての思想家が一様に抱いたものであった。諸君はその人々の著作を繙くことにより、いかなる問題を彼等

末松 亜紀

が抱いたか、いかにして問題に解答を与えたかを知って、諸君の為の問題と解決とに多大の暗示が与えられる」⁵⁰と述べており、読書が人生観の構築に資することを挙げている。このように書物を通じて思想形成の過程に触れることで、高等学校生が既成の思想を享受するばかりではなく、自己の思想や人生観の形成主体になってほしいと河合が考えていると推測できる。また読書が人生観の構築だけでなく、河合が生涯訴え続けてきた教養形成にも同時に資するものであることは言うまでもない。

4. 1930年代の学生の実情に対する批評

ところで、河合は1930年代当時の学生をどのように捉えていたのだろうか。1931年に起こった満州事変以前は、マルクス主義を自己の人生観として信奉している高等学校生や大学生が多く見られた。しかし満州事変以後、政府による厳しい弾圧を受けたマルクス主義は急速に凋落したため、人生観としての支持が失われていくこととなった。その後の学生の状況について河合は、「凡そ一つの主義を信奉するまでに必要とすべき研究の不足、夫々の主義を比較検討する場合に欠くべからざる批判的態度の欠如、一旦自己の信条と定めた主義に対しては、飽くまで之を貫徹せんとする思想的節操のないこと、さらに根本的に突きつめれば、凡そ主義と称するものへの欲求を持たない」⁵¹と評している。すなわち、マルクス主義に代わる人生観となり得る思想を検討することなく、「何ら一定の人生観とか世界観とかを持ち合わせない」⁵²状態に陥っていたのである。すなわち、河合が高等学校時代の任務として格別に重視した「人生観の構築」が達成されていなかったのである。そのような当時の学生を以下のように厳しく批判しており、1930年代の知的青年層の状況を知ろうえで、貴重な証言となっている。

一定の人生観がない為に、現代学生の意識生活は、一つのものに統一されていない、云わば彼等は肉体的に一つの『物』ではあろうとも、精神的に一つの『人』ではない、即ち人格が分裂している。人格の統一ある所にのみ強さがある、分裂せる人格の所有者は、彼れの焦点が分散しているが故に、押せども突けども動かぬ性格の強さがない。ここに於て現在学生の通有性として何人も気付くべき性格の弱さが現われて来る。⁵³

教養に重要性を置く人生観を持つものは、当然に読書に潜心すべきであろうが、その人生観が何であろうとも、それによって邁進するものは、それに必要な読書の努力は為されねばならない筈である。然るに現代学生に人生観のないことは、努力克己の気風を消滅せしめ、無為懶惰に一日一日を送らせているのである。⁵⁴

本章の冒頭で述べたように、学生たちは人生観構築に対する意欲を持っていなかったため、当然のことながらそれに必要不可欠な読書への意欲も減退していたのであるが、それに加えて上記のように人生観が構築されていない結果として引き起こされる読書への意欲の減退も指摘されている。総じて当時の学生は、高等学校生活の中心とされた読書行為から遠ざかっていたのである。またその結果として、「彼等の教養の不足していること」⁵⁵を以下のように厳しく指摘している。

ここに云う教養にも色々の意味が考えられるが、今暫く芸術等をも含めた教養を問わないとして、単に読書による教養と云うことに限局しても、彼等の教養は著しく低下していると云われる。哲学、倫理学等の根本的の教養は勿論、文学、伝記、政治、社会等に亘って、高等教育を受けたものから必然に予期される教養は、吾々の驚くべきほど欠如している。⁵⁶

末松 亜紀

このような当時の学生たちに直面して芽生えた問題意識が背景となり、河合は彼らに人生観構築や教養形成に資する良質な読書の手引きを与える目的で作成されたものこそ、「高等学校時代の読書」における文献目録（以下、「当目録」）であったと強く推測される。そして当目録は、河合自身の教養観の内実を示すものとしても重要な史料として考えることができる。

5. 「高等学校時代の読書」の目録

当目録は、「哲学」「倫理学」「思想」「社会思想」「伝記」「歴史」「文学」「随筆紀行」「経典宗教」「科学」の10項目で構成されており、やや大きく見ると、哲・史・文の人文科学を中心として、社会科学は社会思想までを含み、若干の自然科学も含んでいる。合わせて188件の書物が掲載され、その中でも特に繙読が推奨される28件（14.8%）の書物には、「※」印がつけられている。

当目録の量的な分析については、洋書が全188件中102件（54.2%）と、全体の約半数を占めており、強い西洋志向が見られる。従来の教養主義はドイツの書物が読書の中心であったが、当目録ではイギリス出身の原著者の著作が多く掲載されており、イギリス哲学に大きく感化された河合の特色が色濃く出ている。全項目を通じて多く取り上げられているのは、河合自身の著作（9件）の他にカント（8件）、ゲーテ（8件）、阿部次郎（7件）、ミル（5件）、カーライル（5件）、プラトン（5件）などである。なお、女性著者は野上弥生子のみであり、男性文化の性格が強いことが指摘できる。

質的な分析を通してみると、項目を越えて著者には一定の傾向が見られる。まずはゲーテとカント、イギリス理想主義の系譜に属する人物、新カント派、日本人では京都学派、ケーベル・夏目漱石門下、内村鑑三

や第一高等学校につながる人脈、阿部次郎を筆頭に大正期の教養主義を代表する学者、思想家などが多く取り上げられている。また、当目録は高等学校生の人生観構築や教養形成を目的としているが、「社会思想」の項目に河合の『ファシズム批判』が入ることで、現代社会への関心と、社会改革への主体的な関与も促す内容となっている。同書は河合の教養主義者としての側面と、自由主義者としての側面の双方の結び目を現していると考えられる。

配列については、当目録の冒頭に「哲学」の項目があり、次いで「倫理学」「思想」と配列されている。また件数において、「哲学」の項目が最大件数(全36件)を誇っており、倫理学(全10件)と思想(全25件)を合わせると71件(37.8%)も掲載されている。河合は「高等学校時代にいかなる書を読むべきかとは、屢々人から受ける質問であるが、高等学校時代が(中略)人生観を構成する時だとするならば、先ず挙げらるべき書物は、哲学、倫理学等要するに思想に関するものでなければならない」⁵⁷と述べている。このように、河合が人生観の構築や教養形成において最も重視しているのは哲学であった。しかし、「哲学は哲学書の中だけに在るのではない」⁵⁸として、文学の存在を挙げている。河合は「小説の中には作者の人生観や社会観が現れているので、文学としての価値を別としても、一種の哲学的文献として、小説を読むことに意義は認められる」⁵⁹と、哲学との親和性の高さを指摘している。当目録の「文学」の項目は、河合による文献の選択にとりわけ大きな特徴が現れ、河合の高等学校生たちに対する思いが躍動しているため、ここでは「文学」の項目について詳しく見ていこう。

外国文学についてであるが、ドイツ文学はシラーの他に、ゲーテが圧倒的な存在感を示している。当項目で「※」印がついているのは3件であるが、3件すべてがゲーテの文学作品であるのである。河合は「独逸のゲーテ、あれが歴史の中の一番の全人である。科学者であり、芸術家であり、政治家であり、人間の能力を皆備えている。而もそれを統一し

末松 亜紀

ている。あれが成長した一つの極到、高いレベルと言って差し支えない」⁶⁰と、人格者として絶賛しており、深く尊敬していることが分かる。なお、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』は教養小説(Bildungsroman)として著名であるが、同じく教養小説の系譜に属するトーマス・マンの『魔の山』が掲載されていないことは指摘しておきたい。教養小説として同様に著名なロマン・ローラン『ジャン・クリストフ』は、唯一掲載されたフランス文学である。ロシア文学については、理想主義思想を持ち、白樺派の思想の源流となったトルストイの作品が2件掲載されている。また近代的な自我を描いたドストエフスキーの作品も2件掲載されているが、当時評価の高かったチェーホフやプーシキンの作品が掲載されていない。英文学については河合が第一高等学校時代に親しんだテニソンやブラウニングの詩集2件が掲載されている。しかし英文学史上最も存在感があるとしても過言ではないシェイクスピア、また桂冠詩人であるワーズワースの作品が掲載されていないことは興味深い事実である。

日本文学については、夏目漱石、島崎藤村、国木田独歩、有島武郎、二葉亭四迷が掲載されており、彼らの作風に河合の思いが代弁されていると考えられはしないだろうか。彼らの作品の中には、人生に向き合って誠実に悩む青年の姿が描かれている。これは河合が青年たちに対して、“What should I be?”という問いを抱いて人生観を構築するなど、河合が青年たちに対して求めている、人生に対する態度に通ずるものである。

その他の特徴としては、夏目漱石は文学界において教養主義や人格主義を推し進めた人物であるが、漱石と篤い親交のあった高浜虚子や漱石門下である野上弥生子など、漱石人脈の存在も目立つ。続いて白樺派の有島武郎、武者小路実篤、長与善郎、倉田百三の顔ぶれも目立つ。白樺派は「自己を生かす」という個性尊重と理想主義思想を基調としており、河合が親近感を抱いていた。また白樺派には属さないものの、白樺派の思想の源流となったトルストイに心酔した徳富蘆花も、そのような思想的背景が相まって掲載されたものと考えられる。

一方、当時広く読まれていたが、同項目に掲載されなかったものとしては、ロマン主義から派生した耽美派の代表的作家である、谷崎潤一郎や永井荷風の作品がある。耽美派とは、美と快楽を味わい尽くすことに人生最高の価値を見出す文学思潮である。河合は「況や学生生活には為すべき重大な問題がある。それを看過して恋に身を投ずるのは、学生生活の重要性を忘却したものである。(中略)教養とは惨ましい人生の戦いである。此の戦いへの出立は、学生時代を措いて、又と再び来るの時はないのである」⁶¹と、学生時代の恋愛に反対の立場を採っているため、ロマン主義や耽美派に属する作家の作品に掲載しなかったものと考えられる。同様に、自然主義の代表的作家である田山花袋の作品も掲載されていない。自然主義は、性欲や生まれつき与えられた条件から人間が逃れられない様を描いている。これは河合の理想主義思想と対極に位置することは言うまでもないだろう。さらに、プロレタリア文学も掲載されていない。プロレタリア文学の系譜に属する作家には、当時非合法とされた日本共産党の黨員が多く、作品にはそれらの活動に導こうとする傾向があるため、教育的配慮により掲載しなかったものと考えられる。なお、河合は社会主義思想研究の価値は認めていたものの、高等学校時代は時期尚早であると、極めて慎重な姿勢をとっていた。また河合は意外にも講談ものを研究の合間に好んで読んでいたが⁶²、講談社文化に属する作品は掲載されておらず、いずれも岩波文化に属する純文学作品ばかりである。このように、当項目に採用されていない文学思潮にこそ、河合の求めている人生観が反転して示されていると考えられる。

おわりに

河合は高等学校時代を「日本の学生生活の精華」と、人格形成上高く位置づけ、そこで人生観を構築することを重要な任務とした。また高等

末松 亜紀

学校生活の中心には、読書を位置づけている。「高等学校時代の読書」の文献目録には、河合が高等学校生に求める教養の具体的内実が示されている。そこでは全体として、高等学校生たちの人生観構築や教養形成に資する文献が選択されているが、とりわけ「文学」の項目では、河合が求めている人生観構築の姿勢や人生観の内実が作家の顔ぶれによって顕著に現れている。例えばゲーテとロマン・ローランの教養小説、また夏目漱石、島崎藤村、国木田独歩、有島武郎、二葉亭四迷の作中に出てくる、人生に向き合って誠実に悩む青年の姿は、まさに河合の求めている学生の姿である。さらに日本の文学思潮では、白樺派が重んじられる一方で、ロマン主義や耽美派、自然主義、プロレタリア文学の系譜に属する作家の作品は掲載されていない。つまり、河合の思想体系の中核にある、人格に最高価値を置く理想主義を人生観として持ってほしいと考えていることが分かる。

表1 文学(全35件)

番号	著訳者	書名	発行所
1	夏目漱石	文学論	大倉書店
2	土居光知	文学序説	岩波書店
3	Oliver Elton	Suevey of English Literture, 4 vols.	
4	J. Bailey 石田憲次(訳)	Dr. Johnson and His Circle. 「ジョンソン博士とその群」	研究社
5	H. N. Brailsford	Shelley, Godwin and Their Circles.	Home University Library
6	齋藤勇	思潮を中心として見たる英文学史	研究社
7	A. Tennyson 入江直裕(訳)	In Memoriam. 「イン・メモリアム」	岩波文庫
8	R. Browning 齋藤勇(訳)	Poetical Works. 「サウル」あり	岩波文庫
9	W. Mahrholz	Deutsche Literatur der Gegenwart.	
10	K. Heinemann	Deutsche Dichtung	
※ 11	J. W. Goethe 森嶋外(訳)	Faust. 「ファウスト」二巻	岩波文庫
※ 12	J. W. Goethe 林久男(訳)	Wilhelm Meister. 「[ウィ]ルヘルム・マイスター」二巻	岩波文庫
※ 13	J. W. Goethe 小牧健夫(訳)	Dichtung und Wahrheit. 「詩と真実」二巻	改造社
14	F. Schiller 鼓常良(訳)	Wallenstein. 「ヴァ」レンシュタイン」	岩波文庫
15	F. Schiller 桜井政隆(訳)	Wilhelm Tell. 「ヴィルヘルム・テル」	岩波文庫
16	トルストイ	復活 三巻	岩波文庫
17	トルストイ	戦争と平和 四巻七冊	岩波文庫
18	ドストエフスキイ	罪と罰 三巻	岩波文庫
19	ドストエフスキイ	カラマゾフの兄弟 四巻	岩波文庫
20	ロマン・ローラン	ジャン・クリストフ 八冊	岩波文庫
21	夏目漱石	諸著作(岩波書店版全集あり)	
22	徳富蘆花	諸著作(新潮社版全集あり)	
23	島崎藤村	諸著作(春陽堂版全集あり)	
24	国木田独步	諸著作	
25	有島武郎	諸著作(新潮社版全集あり)	
26	二葉亭四迷	諸著作	
27	高浜虚子	諸著作(改造社版全集あり)	
28	武者小路実篤	諸著作(芸術社版全集あり)	
29	長与善郎	諸著作	
30	厨川白村	諸著作(改造社版全集あり)	
31	倉田百三	出家とその弟子	岩波文庫
32	倉田百三	布施太子の入山	岩波文庫
33	野上弥生子	新しき命	岩波書店
34	野上弥生子	人間創造	岩波書店
35	バルフィンチ 野上弥生子(訳)	「希臘羅馬神話」	岩波文庫

末松 亜紀

注

- ¹ 本稿は修士論文の一部を抜粋し、再構成したものである。
- ² 武田清子 2002 「日本リベラリズムにおける河合榮治郎」河合榮治郎研究会編『教養の思想 その再評価から新たなアプローチへ』社会思想社、14頁
- ³ 松井慎一郎 2001 『戦闘的自由主義者 河合榮治郎』社会思想社、2004 『評伝河合榮治郎—戦闘的自由主義者の生涯』玉川大学出版部、2009 『河合榮治郎 戦闘的自由主義者の真実』中央公論新社
- ⁴ 竹内洋 1999 『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社、2003 『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』中公新書
- ⁵ 筒井清忠 2009 『歴史社会学的考察 日本型「教養」の運命』岩波現代文庫(初出1995年)
- ⁶ 伊原吉之助 1965 「河合榮治郎の教養論」『社会思想研究』第16巻、第4号
- ⁷ 渡辺かよ子 1989 「1930年代の教養論に関する序論的考察—河合榮治郎編『学生叢書』を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第36巻
- ⁸ 渡辺かよ子 1990 「1930年代の教養論に関する考察—河合榮治郎の教養論を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第38巻
- ⁹ 清滝仁志 2008 「河合榮治郎における教養と理想主義」『駒澤法学』第28巻
- ¹⁰ 青木育志 2012 『教養主義者 河合榮治郎』春風社
- ¹¹ 高鹽忠愛 1935 「河合教授の高等学校論を讀みて」『一高同窓会会報』第24号
- ¹² 河合榮治郎 1935 『第一学生生活』日本評論社所収
- ¹³ 河合榮治郎 1936 「学生時代の回顧」『学生と教養』日本評論社、1937 『第二学生生活』所収 日本評論社(社会思想研究会編1968『河合榮治郎全集』第17巻所収 社会思想社、157頁)(以下、『河合榮治郎全集』第17巻と記す)
- ¹⁴ 新渡戸稲造は1906(明治39)年から7年間、第一高等学校の校長を務めた
- ¹⁵ 河合榮治郎 1935 「新渡戸稲造博士」『第一学生生活』日本評論社(『河合榮治郎全集』第16巻、243頁)
- ¹⁶ 河合榮治郎 1936 前掲「学生時代の回顧」(『河合榮治郎全集』第17巻、157頁)
- ¹⁷ 文部省内教育史編纂会編 1938 『明治以降教育制度発達史』第3巻 龍吟社、207頁
- ¹⁸ 文部省内教育史編纂会編 1939 『明治以降教育制度発達史』第5巻 龍吟社、233頁
- ¹⁹ 文部省内教育史編纂会編 同上書、257-259頁
- ²⁰ 海後宗臣、寺崎昌男 1969 『大学教育』《戦後日本の教育改革 第9巻》東京大学出版会、389頁
- ²¹ 海後宗臣、寺崎昌男 同上書、389頁
- ²² 海後宗臣、寺崎昌男 同上書、389頁

- ²³ 海後宗臣、寺崎昌男 同上書, 390 頁
- ²⁴ 文部省内教育史編纂会編 1939 前掲『明治以降教育制度発達史』第5巻, 234 頁
- ²⁵ 笈田知義 1982『旧制高等学校教育の展開』ミネルヴァ書房, 29 頁
- ²⁶ 文部省内教育史編纂会編 1939『明治以降教育制度発達史』第5巻 龍吟社, 234 頁
- ²⁷ 竹内洋 1999『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社, 244 頁
- ²⁸ 日記 1934 年 11 月 12 日 (『河合榮治郎全集』第 23 巻, 58 頁)
- ²⁹ 日記 1934 年末「1934 年を送る」(『河合榮治郎全集』第 23 巻, 63 頁)
- ³⁰ 1935 (昭和 10) 年の初版では『学生生活』と題して出版されたが、大きな反響があったため続編を出すことになり、当初の『学生生活』が『第一学生生活』に、続いて出されたものが『第二学生生活』となった。なお、本論文では『第一学生生活』に統一して表記することとする。
- ³¹ 日記 1935 年末「1935 年の回顧」(『河合榮治郎全集』第 20 巻, 21 頁)
- ³² 河合榮治郎 1935「高等学校論」『帝国大学新聞』3月4、11、18日, 1935『第一学生生活』所収 日本評論社(『河合榮治郎全集』第 16 巻, 191 頁)
- ³³ 河合榮治郎 同上書, 193 頁
- ³⁴ 河合榮治郎 1937「大学予科の生活」第一高等学校弁論部の講演, 1937『第二学生生活』所収 日本評論社(『河合榮治郎全集』第 17 巻, 16 頁)
- ³⁵ 河合榮治郎 1935 前掲「高等学校論」(『河合榮治郎全集』第 16 巻, 199 頁)
- ³⁶ 旧制高等学校における学生文化については、ドナルド・T・ローデン 1993『友の憂いに吾は泣く』(上、下)講談社などに詳しい。
- ³⁷ 河合榮治郎 1935 前掲「高等学校論」(『河合榮治郎全集』第 16 巻, 197 頁)
- ³⁸ 河合榮治郎 1934「現代学生に与う」『改造』4月号 改造社, 1935『第一学生生活』所収 日本評論社(『河合榮治郎全集』第 16 巻, 26 頁)
- ³⁹ 河合榮治郎 1935 前掲「高等学校論」(『河合榮治郎全集』第 16 巻, 193 頁)
- ⁴⁰ 河合榮治郎 1937 前掲「大学予科の生活」(『河合榮治郎全集』第 17 巻, 18-19 頁)
- ⁴¹ 河合榮治郎 同上書, 24 頁
- ⁴² 河合榮治郎 同上書. 20 頁
- ⁴³ 河合榮治郎 1934 前掲「現代学生に与う」(『河合榮治郎全集』第 16 巻, 25 頁)
- ⁴⁴ 河合榮治郎 1937 前掲「大学予科の生活」(『河合榮治郎全集』第 17 巻, 20 頁)
- ⁴⁵ 河合榮治郎 1935 前掲「高等学校論」(『河合榮治郎全集』第 16 巻, 192 頁)
- ⁴⁶ 河合榮治郎 同上書, 192 頁
- ⁴⁷ 河合榮治郎 1935「高等学校時代の読書」『第一学生生活』日本評論社(『河合榮治郎全集』第 16 巻, 163 頁)

末松 亜紀

- ⁴⁸ 河合榮治郎 同上書, 163 頁
- ⁴⁹ 河合榮治郎 同上書, 164 頁
- ⁵⁰ 河合榮治郎 1934 前掲「現代学生に与う」(『河合榮治郎全集』第16巻, 28 頁)
- ⁵¹ 河合榮治郎 1937 「教育者に寄するの言」『改造』1月号 改造社, 1937 『時局と自由主義』所収 日本評論社 (『河合榮治郎全集』第12巻, 77 頁)
- ⁵² 河合榮治郎 同上書, 78 頁
- ⁵³ 河合榮治郎 同上書, 78 頁
- ⁵⁴ 河合榮治郎 同上書, 79 頁
- ⁵⁵ 河合榮治郎 同上書, 79 頁
- ⁵⁶ 河合榮治郎 同上書, 79 頁
- ⁵⁷ 河合榮治郎 1935 前掲「高等学校時代の読書」(『河合榮治郎全集』第16巻, 165 頁)
- ⁵⁸ 河合榮治郎 1940 「哲学」『学生に与う』日本評論社 (『河合榮治郎全集』第14巻, 96 頁)
- ⁵⁹ 河合榮治郎 1940 同上書, 90 頁
- ⁶⁰ 河合榮治郎 1932 成人教育講座における講演の一部, 1947 『社会思想と理想主義』所収 実業之日本社, (『河合榮治郎全集』第13巻, 137 頁)
- ⁶¹ 河合榮治郎 1940 「恋愛」前掲『学生に与う』(『河合榮治郎全集』第14巻, 233 頁)
- ⁶² 塩尻公明 1948 「河合先生の想ひ出」社会思想研究会編『河合榮治郎 伝記と追想』社会思想研究会出版部, 292 頁)